



第 12 号

2000年12月1日

熊本電波工業高等専門学校
図 書 館

〒861-1102

熊本県菊池郡西合志町須屋2659-2

TEL 096-242-2121



目 次

“ 随 想 ”

- ・ 電波高専での4年と半年 電子工学科5年 田中麻子 2

“ 第22回校内読書感想文コンクール選考結果及び作品紹介 ” 4

“ 図書館からのお知らせ ”

- ・ 新着図書・AVソフト紹介 15
- ・ 平成12年度図書館委員・学生図書委員紹介 18
- ・ 図書館利用状況報告 19

● 随 想 ●

電波高専での4年と半年

電子工学科5年 田中 麻子

電波高専での生活も、とうとうあと半年を切り、卒業までのカウントダウンが始まった。就職先も順調に決定し、勉強も今のところ不安はない。そんな中、少し早いのかもかもしれないが、しみじみと電波高専での生活を思い出すことが増えてきた。

私の電波での生活は、「ああ、よく遊んだなあ」「ああ、あまり遊ばなかったなあ」「そういえば、あまり勉強しなかったなあ」「あの時はこうすればよかった」「あのときはあの行動でよかったんだ」という後悔と誇らしさが混ざった思い出ばかりだ。このことは、一見矛盾しているようだが、私の中ではきちんと矛盾せずに成立している。

電波高専に来て、本当に私は遊ばなかった。これは、私の中の真面目で保守的な部分がそうさせたのだ。私は世に言う「コギャル」のような行動はほとんどしなかった。髪も黒いし、制服もまったくいじらずに着ていた。ルーズソックスなんて、1足も持っていない。飲み会にいったのもほんの数回で、それも上級生になってからだ。原付バイクには乗っていたが、それもほとんど通学用で、夜遊びなんていうものはまったくしていない。こういう生活は、私の中の「そういう世の中に踊らされたようなことは出来ないわ」という、少し偏屈すぎるプライドがさせたことなのだが、今は少し後悔している。せっかく電波高専にきたのだから、もっといろいろと世界を広げてみればよかったのだ。普通高校では入れない世界に、もっともっと自分から入り込んでいけばよかった。電波では「茶パツにピアス、ミニスカ、ルーズ」はごく普通で、別に不良を見るような目では見られなかったのに。だが、まだ制服を着ていたとき、私は強固なまでにそういうものを自分の生活から排除していた。本当にもったいないことをした。高校時代は、唯一はめをはずして遊びまわれる時代

だったのに。

と、半年前までは本当に後悔していた。が、ここ最近はまだ別の見方をしている。たとえば、いまの私の記憶を持ったままで、もし4歳若返って電波高専の一年生になったら、私は「コギャル」のような生活をするだろうか？ 答えは否だ。きっと、もう一度、まったく同じ「堅い」生活を送るに違いない。根本的に、私という人間はそういう人間なのだ。たかがちょっとやそっと若返ったからって、そうそう自分の性格が変わるとは思えない。結局、私は心の底から私らしく生活していた、ということなのだ。

と、こう書くと、まるで学校と家とを往復するだけの生活を送っていたようだが、決してそんなことはない。私は電波高専に入って本当によく遊んだ。

電波高専に入学した時、私は「普通高校に行ったら絶対に出来ないようなことをしよう」と決意していた。簡単に言えば「受験がないのだから、自分の時間を思いっきり自分のためだけに費やしてやる！」ということだ。そして、それを実行に移した。

まず、習い事を増やした。それまでも週に1回の習い事をしていたのだが、さらに増やした。結局、短期のものも含めると全部で4つ習い事をした。そのうち1つは週2日だったので、一番多いときは、週に5回習い事をしていた。さすがにその時は体力的にはきつかったが、とても楽しかった。毎日が充実していた。どれも、自分で「学びたい」と思ってやっていたことだったからだ。普通高校にいたら、決して出来なかったに違いない。

それから、旅行に行った。ほぼ1年おきに京都へ遊びに行った。京都には兄がいて、宿代が無料だったのだ。それから、東京にも行った。佐賀にも行った。南紀州巡りも行った。山陰も行った。長崎にも行ったし、奈良の正倉院展にも行った。それらの大抵は夏休みや春休みを費やしたもので、母と二人旅を楽しんだ。

4年生のときには、インターネットで知り合った人たちとオフ会をするためや、美術館へ行くために、ほぼ半年にわたり月に1回のペースで福岡へ遊びに

いったりもした。その上、ずっとあこがれていた巫女さんのアルバイトもした。毎日毎日、たくさんの本も読んだ。いろいろな経験を経ることが、本当に楽しかった。入学したときの決意は、ほぼ完全に実行したといってもいいだろう。

遊びだけでなく、ちゃんと勉強もそれなりにした。成績は中の上ぐらいで安定していた。出来るだけきちんとノートを取るようにしていたし、授業はまじめに聞くようにしていた。家で勉強するのはテスト前だけだったが、この4年間それでなんとかなった。ただ、勉強に関しては、少し後悔している。実は、もう少し、深く勉強をしておけばよかった。今になってようやく、私の勉強はテストやそういうものを乗り切るためのもので、実はぜんぜん実力がついていない教科があったことがわかったのだ。興味のある教科は、本当によく頭に入ってきたし、きちんと理解できた。よく勉強もした。だが、わからない教科は丸暗記で乗り切ってきた。教科によって大きな実力差がついてしまい、それがとても悔しい。

電波高専に来て、自由な時間や知識以外に、もっと大切なものも得た。友情だ。こういう言い方はとても照れくさいのだが、多分電波高専で得たもっともかけがえのないものではないだろうか。中学時代、友人関係で少しいろいろあったから、電波高専で仲良く話せる友人が出来たのは、本当に本当にうれしかった。いろんなことを気軽に話せ、私の知らないことを教えてくれるとても大切な友人たちや、自分の趣味について深く語り合える同好の士（人はそれをオタク仲間と呼ぶ）。彼女（彼）たちがいてくれたから、電波高専の生活も毎日が楽しくて楽しくてしょうがなかった。彼女（彼）たちがいてくれたから、私は今日も笑っていられるのだ。もちろん、さまざまなことで、ギクシヤクしたり、けんかに巻き込まれることもあった。けれど、そのことさえも、本当に大切な、かけがえのない思い出だ。

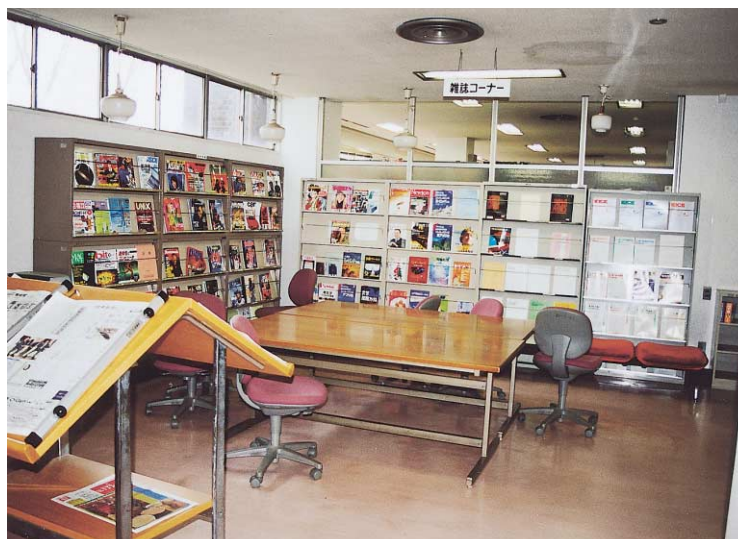
このほかにも、もっともっと書き切れないほどの思い出が私の心の中にある。まだ、卒業まで半年あるというのに、この学校を離れるということを考えるととても悲しい。いっそ、このまま永遠に電波高専にいたことが出来たなら、とさえ思ってしまう。私は教科担当の先生たちだけでなく、実習係

や図書館の先生、学生係の方々にも大変可愛がってもらったから、卒業してしまえばめったにお世話にならなかった人に会えなくなるというのが、本当につらい。

ゆっくりと廊下を歩いてみる。そうすると、この4年と半年間の私の姿が見える気がする時がある。暑さでだれていたり、冬の寒さの中ストーブで手をあたためていたり、テスト前で苦しんでいたり、友人たちと楽しくおしゃべりしたり。そういう思い出や経験が、この4年と半年でゆっくりゆっくりと私を作っていった。そのことが、自分の思い出を辿ると、ものすごくよく分かる。そういう時は大抵、「ああ、あの時は、まだまだ青かったなあ」と、恥ずかしさでいっぱいになる。

私は、下級生の人に「もっといろいろなことを経験した方がいいよ」と教えてあげたい。せっかく時間だけは無駄になるほどあるのだ。もちろん、無駄に時間を過ごすというのも、とても大切な経験ではあるのだが、どうか自分の世界を狭めないようにいろいろな世界にもっと飛び込んでいってほしい。アルバイトもいいだろうし、今まで話したことのないタイプの友人を作ってみるのもいい。程々ならば、夜遊びだってとても重要な経験となるだろう。とにかく「やらなくて後悔するかもしれない」と思うことは、片っ端からやってみてみるのが大切なのだ。私は、これから私の後に卒業していく後輩たちに、私と同じくらい「電波に来て幸せだった」と言えるような学生時代を送ってほしいと思う。

私は、私に5年間という長期間の幸せと充実した時間とを与えてくれた電波高専に、本当に感謝している。



●第22回校内読書感想文コンクール選考結果及び作品紹介●

■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■ 優秀賞2編、佳作8編を決定！ ■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■

本年度の校内読書感想文コンクールは、第1次、第2次、第3次の審査を経て下記の10編が入賞と決定されました。



第22回校内読書感想文コンクール選考結果

区 分	作 品 名	学科学年	氏 名
最優秀作	該当作なし		
優 秀 作	アルジャーノンに花束を	1年4組	後藤 祥治
〃	「こころ」を読んで	2年3組	作本 紘一
佳 作	二十四の瞳	1年1組	小山 枝里
〃	罪と罰	1年2組	永田 真之
〃	ソフィーの世界	1年3組	児玉 愛子
〃	呼人（よひと）	1年3組	山下 夏江
〃	鼻	2年1組	服部 隆裕
〃	人生の目的とは	2年2組	西 洋平
〃	ヴェロニカ	2年3組	田代 高浩
〃	にんじん	2年4組	假屋 親尊

アルジャーノンに花束を

1年4組 後藤 祥治

知能発達していても、他人に対して思いやりを持つ能力がなければ、そんな知能など空しいものだ。以上が僕がこの小説を読んでみての最終的な結論である。

僕がこの作品を選んだ理由というのは、この作品の中に先天性又は後天性で、脳などに障害を持った人達が登場しているからである。なぜかという、僕の母はこのような人の通う養護学校の教諭をしている。高専の近くの黒石原にも数年前まで勤務していた。だから、母がどのような人達を教育しているか、またそれがどんなに大変なのかを少しでも理解するために今回この作品を読むことにした。

もし30代の大人が小学生のように、ろくに文章を書くことさえ出来なかったらどんな感じだろう。そんなちょっと変わった人（チャーリー・ゴードン）がこの作品の主人公である。この作品のちょっと変わっているところは、話の内容がチャーリーの経過報告（日記みたいなもの）として進んでいくところであるのでそれをふまえてこれを読んでもらいたい。

主人公のチャーリーは小学生のころから教師や同級生に“頭が悪い”と言われ笑われ、いじめられていた。そして学校から薦められ特殊学級に入ってしまった。ようするに知恵遅れである。僕の中学校の級友にも、物事を考えるのが苦手な養護学校へ進んだ人がいるため、よけいチャーリーには親近感がわいてくる。そのチャーリーに人生を変える大きなチャンスが巡ってくる。なんと、成功するかわからないが、知能を発達させるための手術を受けてみないかというのだ。そう尋ねたのは、人の知能などについて研究している、ストラウス博士とニーマー教授であった。

この後数十ページにわたって、チャーリーと博士たちの術前と術後のいろいろな実験が述べられている。中でもおもしろいのが、動物実験としてチャーリーより先に手術を受けた「ねずみ」と迷路を抜け出す競争をする実験である。術前、ねず

みに勝つどころか抜け出すことさえできなかったのに術後、ある日突然勝てるようになったというものであるが、僕はこの様子が数学などの問題を解けるようになるのと似ていると思った。初めわからない問題も同じような問題を繰り返しやっていると次第に答えがだいたい頭の中に浮かび上がるように、迷路のようなパターンのあるものは繰り返し行うことによって解けるようになるということはこの文章から学んだと思う。

チャーリーの知能が発達するにつれて、チャーリーが子供の頃の母親とのやりとりを回想するシーンがしばしば見られる。その例を挙げると、人より物覚えが悪いチャーリーに母親が丁寧に教えている場面、そうかと思うと、あまりにも覚えの悪いチャーリーに母親が激怒して体罰を与えている場面などさまざまである。この母親の対応の変化は、他人の子より出来の悪い子を持った母親の焦りといらだち、そして不安定な精神を物語っているといえると僕は思う。しかし体罰はどうも好めない。何かしてはならない戒めを破ったのなら体罰もいたしかたないと思うが、別に悪い事をしていない、ましてや一所懸命やろうとしている人間に体罰を与えるのは、がんばる行動＝体罰と結び付けてしまう可能性があると思う。

このような体験をしながらチャーリーは知能を発達させていく。文章によるとIQ・70から180以上まで発達したとなっているが、このころからチャーリーの経過報告の内容が変化しつつある。初期の頃は、何も疑われない素直な青年であったが、次第に自分より能力の無い者を罵倒する傲慢な青年と思えるようになっていくのである。この現象はよく有ることだと思う。僕の友人にもいた。でもこのような事は冒頭でも述べたようによい現象とはいえない。「こうなるなら昔の自分の方がよかった、多くいた友人も今はもういない」と、チャーリーが述べているように、人間関係をつくりづらくなる性格である。

友人のいなくなったチャーリーの発達は、ある程度落ち着くのであるが、先に手術を受けた「ねずみ」のアルジャーノンの知能が急に低下し数ヵ月後死亡してしまう。そのチャーリーにも似たような事が起こるのだが、その能力が極端に低下すると彼は酒びたりになり、暴力的になっていく。

このような現象は優等生に多いと思う。頭に自信のある人が突然みんなより劣ったり、評価してもらえなくなったりするとグレたり、最悪の場合、数ヵ月前の九大生の起こした無差別殺人のようなことをやりかねない。とても恐ろしい事である。

この後チャーリーは元の小学生程度の知能に戻るのであるが、それと同時に性格も元の素直な青年のようになる。そして昔の友人ともまた仲良くなる。

この作品のチャーリーの身の上にかかる奇想天外な出来事は僕を含め多くの読者に、人間の知能を人間自身がどうにかしようと思っても、それは、アダムとイブの知恵の実のように人間の力の及ぶものではないという認識を持つと同時に、知能とは人間に与えられた最高の資質であるが、知識を求め過ぎる心が愛情を求める心の排除、人間関係の排除、自己中心的な人格の創造につながる可能性を高めるということ、本当の知能の発達とは、能力と精神が共に発達して初めて知能の発達といえるのだということを、そして、ただがむしやりに学力をつけるより、まず心を発達させることが大切だということを教えてくれているのではなかろうか。もし自分の生き方に疑問を感じている人がいれば僕はこの作品を薦めたい。きっと深い感動を与えてくれるだろう。

「こころ」を読んで

2年3組 作本 紘一

僕が、この本を読んで一番心に残った場面は、何といっても友人を裏切って恋人を得た彼（主人公）が日々、その罪悪感に捕われて身動きのできない状態であった事を有々と書いてある所でした。この本では“人間というものの自体の存在が悪であり、又罪である”と書かれてあると僕は思いました。つまり人間の持っている全ての感情が常にエゴイズムによって働かされているということを感じさせられました。しかし愛の為に裏切りを許す事が不可能であった彼にとって裏切るという行為がどんなに苦痛であったかは図り知れませんが、その時の気持ちとして寧ろ優越感や友人に対する

嫉妬などが書いてあったのが不思議であり矛盾していたと思いました。

彼は自殺をするまでの間、友人の事を思い出すたび“胸が苦しくて恐ろしくて、黒い影が何かを訴えかけている”と言っています。その黒い影とは友人であると最初はそう考えていたのですが、後になって、それは彼の心の中の罪悪感の塊のようなもので一種の幻影のように思い始めました。しかし、僕の偏見から見て愛とは常に競争であり、それが為に育っていくものなのです。この二つの相反する論理は、双方とも正の面と負の面を持っています。又、二つの論理は一つになって初めて愛という一文字を形成するのだと思いました。その愛故の罪悪感、そこには僕が想像さえできない位の深い深い悲しみが存在するのです。

この本は、人々の気持ちの流れが時と共に、又、自然と共に動いているような気がしました。悲しく切ない時には長く続く苦しみのように、又華やかな時には一刹那の如く速く、そういう時の流れが微妙に心理を反映していると思いました。実際、どういう場合でも、自然と時とそして心とが音楽のように絡み合って、ある一種の感情を呼び起こすのです。これらの要素が間違いなく彼らに影響していたと言っても過言ではないでしょう。

金と恋、それは人が最もエゴを貫きやすい要素だと思います。欲というものは数えてもきりが無いと思います。しかし、それらの底には必ず独占欲というものが存在しています。いわば、全ての欲は独占欲という根の上に色づいているのです。僕はこの本を通して人間のエゴの恐ろしさを改めて実感しました。人は誰でも自分の為に生きていくという悲哀な事実を受け止め、背負って生きているのです。彼らはそれを拒みました。自分のエゴと向き合って共に生きていくということを…。だから自分で命を絶ったのです。僕は人間の本能さえ拒否した彼らを哀れむというよりは寧ろ悲しい気持ちを持ちました。

彼は金の面では叔父に欺かれた結果になりましたが、恋の面では友人を自ら欺いてしまう結果となったのです。それは自分の行為は見えないで周囲の行為ばかりが目につくという皮肉な人間の性なのだなとしみじみ感じました。人は誰でも自分自身には盲目なのです。僕はこの本を読んで、も

っと自分というものを根本的に見つめ直す必要があると悟りました。

又、彼の妻が彼の苦しみを知りたいと思いながらも最後まで、知ることができなかった事は少々悲しいことのように思われました。“知らぬが仏”という諺の通り、知らない方がいいのかもしれませんが。しかし、知らないということは何よりも苦痛であると思います。彼は又、自分の犯した罪という黒々した墨を洗いざらいに話すことを恐れたのでしょう。何よりも大切な妻の為に、又、自尊心が傷つくことを堪えられない自分の心の為に――。

人間が持っている感情や動作などが一人一人違うように感じ方などの受身的な部分も一人一人違うのだということを僕はこの本から学びました。そして、どんなに強く見える人でも外部から直接的にも間接的にも受けるそのささいな破壊によって自分というものが、何の躊躇もなく崩れてしまう程人は弱くもろいのだという印象を受けました。その崩れてしまったものを元に戻そうとしても安易な事ではないのです。

私達はいつも周囲に用心をして生きています。私達はそれ程、弱いものだからです。そしてそれが人間というものだと教えてくれたから...

二十四の瞳

1年1組 小山 枝里

この物語の作者である壺井栄さんは、本の中に出てくる女先生と自分を同一化させて私達に自分の思いを伝えている。作者の最も言いたいことは何だろうかと考えながら、私はこの物語を読み深めていった。

“二十四の瞳”は1人の先生と12人の子供達とのふれあいを描いている。先生は戦時中にもかかわらず、とてもモダンな格好で岬の村の人々からは、好かれていなかった。けれども12人の子供達は先生が大好きで、先生の授業の時はみんな輝いていた。しかしそんな心暖まる場面の裏には、戦争という悲しいものがあった。

今はもう世界でも争うほどの先進国になった日本は、50数年前に恐ろしい戦争を経験した。戦争

のためにたくさんの命を失い、それと同じ分だけ不幸を得た。

「ああ、ああ。みんな兵隊好きなんだね…。そんなこっちゃないと思う」

兵隊のまねをして遊んでいる息子達を見て、女先生が言った言葉。先生はどんな気持ちでこの言葉を言ったのだろう。この寂しい言葉には、先生の複雑な気持ちがこめられている。小さな息子達を将来戦争にとられる悔しさと、兵隊になることを憧れとしている息子達の無邪気な姿への悲しさが…。そしてそんな複雑な気持ちは子供達の小さな心の中にもあった。子供達の二十四の瞳はどれも同じように光っているように見えたが、やはりこの中でも貧富の差はある。川本松江という女の子は、とても心のきれいな子だ。彼女には、仕事をしている父と病弱な母と小さな妹と弟がいた。彼女は他人の事でも自分の事のように考える子であった。私が一番印象に残った出来事は、彼女の初めてのわがままだった。

今の時代、子供の欲しいものは、どんなに高価なものでも親が買ってあげる。そんなわがままのあふれる裕福な時代ではなかった50数年前に、松江にも欲しいものがあった。ふたに百合の花の絵のあるアルミニウムの表面を加工した弁当箱。マスノもミサコも持っている弁当箱。何でも我慢して、いつも何も欲しがらない松江が初めてのわがまを言った。しかし時代は戦時中、こんなに小さなわがままでも叶えられない。松江の父と母も、いつの日かは…と思いながらも必死にうそをついていた。私は松江と今の時代の私を比較して考えた。彼女は小学一年生。どんなに欲しくても買ってもらえない。それでも何も言わず我慢する、私に松江のように何でも我慢することができるだろうか。今の裕福な生活にひたりすぎて、私は自分自身が松江よりも子供のように感じた。小学一年生の女の子はとても大きな人物のように思えた。けれど松江のような私よりもずっと大人に思える子がいたのである。

「私は女に生まれて残念です」

コトエという女の子が言葉には出さず、作文で先生に伝えたものだ。まるで女に生まれてきたことを自分の責任のように考えているコトエ。私はこんなコトエを見て心が重くなったような気がした。

先生はどんなに悲しかっただろう。どんなに悔しかっただろう。戦争のために深く傷ついている心を目の前にして…。松江やコトエだけでなく、きっと他の10人の心の中にも深くて痛々しい傷があったのだと思う。

子供達も成長し、兵隊になる年齢。死にむかっていく子供達の背中への

「生きて帰るんだよ」

という寂しげな言葉に老いて小さくなった先生の姿が私の頭の中に映しだされた。

やがて日本は終戦を迎えた。たくさんの失われた命と、たくさんの傷つけられた心とともに。24の光り輝いていた瞳は今もう16の瞳となっていた。そして16の瞳のうち2つの瞳は何も映さない失明した瞳だった。終戦後の荒れ果てた景色を映し出す瞳は14の瞳となっていた。

“二十四の瞳”この物語で作者が最も言いたかったこと。それはこの悲惨な戦争からさまざまなことを学ばなければならないということ。人を大切に思うことは人間として最低の宿命だということ。これができなければ、どんなにお金持ちでも、どんなに頭がよくても人として愛されないと思う。私はこれからの高専生活において、人として愛される人間になりたいと思う。そして一緒に苦難を乗り越え、一緒に幸せを味わえるような友達と出会いたい。私は“二十四の瞳”から、人を大切にする事の重要性を学んだような気がする。

罪と罰

1年2組 永田 真之

この本を読んでいて思ったことは、人間は罪の意識によって変わってしまうという事です。この本の主人公はそれが特に顕著で人を殺す計画を頭に思い浮かべるだけで、罪の意識にとらわれて、自分の事を卑下して、慣れない酒を飲んで、慣れない事をして、体調まで崩してしまう程に悩んでしまいます。しかもそんな折、母親からの手紙で自分がお金を送って欲しいと頼んだ事で、妹が苦しみ、自分を大学に通わせ、出世させる為に意に添わぬ結婚をしようとしている事を知り、更に精

神に異常をきたし始め、ついには金を得る為に殺人までしてしまいました。ここまで読んだ所で考えたことは、罪の意識は人間の心に大きな影響を与えるということです。人は罪悪感だけで体調を崩したり、精神に異常をきたしたりするものだという事は、このような事が自分にも起こる可能性があることを考えると怖いと思います。

次に、僕がこの本を全体的に見て自分にとっての教訓として覚えておきたいと思ったことは罪悪感を持ちすぎてはいけないということです。もちろん、罪悪感を持つてはいけないということではありません。もし罪悪感を持たないのならば、最近よく言われる「犯罪の低年齢化」を招いている人達と何ら変わらない罪悪感の無い犯罪を犯してしまうことになるからです。だからといって、この本の主人公のように罪悪感を持ちすぎると、大きすぎる罪悪感によって精神に異常をきたし、罪悪感から来る恐怖によって罪悪感を麻痺させることになってしまいます。罪悪感が大きすぎて犯罪を起こさない、というより起こせない人もいるかもしれませんが、人間が危機的状況や追いつめられた状況になると、前に書いたように罪悪感を麻痺させて、犯罪を起こす可能性を考えると、大きすぎる罪悪感も小さな罪悪感も身を滅ぼしてしまうことがわかんと思います。

これまでに書いたようなことが絶対に正しいとは思いますが、こういうことが起こり得るのは事実でもあります。このことと一緒に考える必要があるのは、最初に書いた「人間は罪の意識によって変わってしまう」ということだと思います。そして、この本の主人公は殺人事件を起こしてからというもの、会う人達全てに疑いの目を向けるようになってしまいます。例えば、親切にしてくれていた友人や、世話をしてくれていた下宿のお手伝いさんまでも疑うようになってしまいます。そのせいで体調を更に崩して3日も寝込んでしまい、目が覚めてからは前にも増して疑い深くなり、しかも、表面的には平静を装っておきながら、心の中では相手の言った言葉一つ一つを反芻し、どこかに自分を罠にはめる言葉が無いかを確かめてから答える等、性格が歪み、疑いの目無しで相手を見ることが出来なくなってしまいました。罪を犯したことで以前は善良とは言えないまでも少な

くとも悪人と呼べない程度には普通に生活してきた人が、人を疑い、その一言一言にまで神経を使うようになってしまった理由は殺人を犯したことです。その事においてのみ彼は普通の人とは違う存在になってしまったのです。しかし彼は、ある女性と出会い、彼女に全てを打ち明けることで精神的にも安定し、落ち着きを取り戻していきます。人はこうも簡単に変わってしまうのでしょうか。彼の例でいうと、殺人を犯すことで悪い方へと向かい、彼女と出会うことで良い方へと向かい始めます。彼ほど極端ではないにしろ、誰もがこのようになる可能性があるのだから、人というのは案外簡単に変わってしまうのだということが、この本を読んでいて考えた事だし、わかった事でもあります。

ソフィーの世界

1年3組 児玉 愛子

私はこの春、ソフィーの世界を読みました。家にある本の中でいざ題材となる本を探そうと、物語や小説、エッセイや歴史小説、詩・随筆なども読んでみたけれど、この本が一番興味があることを知りました。哲学の本だけれども、私にはこんな難しい本が好きなんだという自分の新たな一面を知ることができました。そしてさらにこの本を読むときの集中力がすさまじく、中一の頃の新しい希望を持って取り組んでいた頃を思い出しました。私にとってソフィーの世界は、私を中学校の入学当時の頃のように新鮮な気持ちにしてくれた本です。

内容的に感想を述べると、ソフィーの大人になっていく手前で人間とは何だろうと考えていくところが私と重ねてもいいなと感心しました。実際ソフィーの考え、想像することがいかにも親しみを感じられました。まだ大人のように常識にとらわれてはいませんし、身近なことに疑問を抱く私なのでそういう子供の面がソフィーと似ていました。本書で、ソフィーの家に哲学講座の手紙が何通も来るけれど、その手紙には差出人の名が書かれていません。切手も貼ってなくて、ソフィーはいつ、誰が郵便受けに入れに来るのだろう

と気になって仕方がなくなります。そこが子供らしいと思いました。

この世になぜ神話が生まれたのか。それはなぜ雨が降り、植物が育ち、太陽が照り、人間が存在する、などの地球上の存在の意味を人間なりの考えで想像されてきたと書いてありました。それは、まだ人間が科学的な根拠を知る前です。そして、人間が科学を生み出す素となる頃です。そういう無知なとき、私なら自然の理をどう説明するだろう。ソフィーはそう疑問に思い自分なりの物語を考えました。そうして想像することによって神話は生まれたのだとされています。私はすごく納得しました。私もソフィーのように神話を考えて信じて祈ったりすると思います。人間はそれから時が経ち、化学を証明しようとする。なぜ人間は真実を知ろうとするのか。それは人間自身を高めると共に生きるために知らなければならないと思ってきたからであると考えています。文明が発達して人間の頭が良くなり、神話が真実なのかと疑問を持つのです。何事も疑問から始まるという言葉聞いたことがあるけれど、この事もこの言葉の表れなのかと思いました。では、人間は長い間疑問を解明しようとして発展してきているのですが、現代、私たちは何の為に勉強しているのでしょうか。ただ将来の為にと言って無理に勉強しても面白くないです。昔の人々の様に一つ一つ疑問を持ってそれに向かって取り組むことが重要だと思うのです。誰でも幼い頃は何も知りません。だからよく何故と親に聞いたりします。それはその頃の勉強であり、その勉強は自分にとって楽しいものだったと記憶しています。何故積極的かつ楽しく学ぶことができたか。それは幼い頃持っていた素直さから来ていると考えられます。今、勉強が楽しくないと思うのは、興味も関心もないのに受験の為に強制的にやらされているという気持ちがあったからだと思います。中1の時は新しい学習内容や現実を知らないが為にあった夢に向けての意欲が毎日を実感させてくれ、学ぶことを面白く感じることができました。そういう事について真剣に考える機会を与えてくれたのでこの本は私が本当にやりたいことを達成しようとする決意をますます固めてくれた大切な本だと思います。

よ ひと
呼 人

1年3組 山下 夏江

12歳の夏休み最後の日の冒険に始まり、人種差別、偏見、地雷、過激派にテロ、そして永遠の命。思い浮かべてみると、小説とはいえ私がこれまでに読んだ本の中で最も内容の濃い作品だった。しかし、「呼人」を読むことで今まで深く考えたことのなかった問題や事実、そして自分と向き合う機会になったように思う。

12歳の主人公、呼人は世の中の大人たちを見て「大人になんかなりたくない」と思っていた。その矢先に呼人は12歳で心と体の成長が止まってしまう病気であることが判明する。それから中学、高校、大学と進学するが、いつも学校や社会から偏見の目で見られ苦痛の毎日を送ることになった。「君だけ大人にならなくていいよ」と告げられたのだ。一瞬、願いが叶ったと思ったものの呼人は取り残されたように感じた。

私もここ1、2年、特に中学卒業前の3月に「大人になりたくない、ずっと皆このままだったらいいのに」と、よく考えていた。でももしそれが現実になったら、呼人のように一人だけ今のままの状態、変化し続ける世界を見送るという視点に立ったら…。私は孤独で苦しくて苦しくて、何も今のように楽しく幸せには感じられないだろうと思った。仲の良い友達がいて守られていて慣れた生活から、見知らぬ人や分からない事だらけの生活、環境に飛び込んでいく不安。私の場合、「大人になりたくない」と思ったのは、幸せゆえの贅沢、わがままなのではないだろうか。以前はいろんな人との出会いがとても楽しみだった。しかし最近是不安に負けてそんな自分を見失っていた。「大人になるっていう、未知の自分に変化していくことの怖さより、まったく変化しない怖さのほうがよっぽど辛い」実年齢では19歳になった呼人が「12歳」の頃からの友達に宛てた手紙にそう書いていた。でもまさに私に言われたようだった。

「お前はずるいよ」

と、呼人に言われたような気がした。それからは、大人とはまだ程遠いけど「未知の自分」に出会え

るであろう新しい生活が待ち遠しく感じられるようになった。未知だから可能性がいっぱいあって自分しだいで何でも現実に変えられる、そんな勇氣もわいてきた。

そして、この作品を、12歳に始まった呼人の冒険を貫く一つのテーマ「生きる意味、何故この世に生まれてきたのか」。この答えを見つけるべく、母親を探す旅は神様に友人に導かれ家族に支えられて、2010年37歳まで続く。母親が妊娠中に飲んだ謎の薬が原因で体と心は12歳のまま。自ら命を絶たない限り永遠に。なぜそんな自分を生んだのか尋ねてみたかったのだ。

—生きる意味—。思えば深く考えたことは一度もなかった。私は今ここにこうして存在していることに何の疑問もなく、そして当たり前だった。でも呼人の冒険を読んで考えてみた。生まれてきた意味を。まず、生まれてきたことが幸せなことで、その幸せを無駄に、粗末にしないこと—これも十分意味あることなのではないだろうか。

そして、「12歳」の頃からの友人、厚介。呼人の冒険に同行し命を落とすことになったが、厚介もまた冒険を通して「生きる意味、生まれてきた意味」を探していた。厚介が死の直前に分かった「意味」。それは「大切な友達を守ること」だった。

—生きる意味—。人生をまっとうした時に本当に分かるものなのかもしれない…。

呼人はこの先続く人生の「永遠の課題」として、そのことを考え見つめなければならなかった。自分だけは12歳のまま、まわりの人は多くの困難にたづまずき年老いていく。その姿を見送らなければならない。そんな境遇の中で見据える「永遠の課題」は、とてつもなく、なんと言葉では言い表せないくらい大きく重かったと思う。「意味のない人生なんてない」呼人はそう言った。私達は「永遠」ではない。たかだか7、80年、まして事故や病気でいつ消えるとも知れない命。また、老若男女を問わず自殺が増えているこの時代。なおさらこの課題と向き合わなければならないのではないだろうか。私も探したいと思う。案外、身近な生活の中に転がっていることなのかもしれない。死ぬ時まで謎のままかもしれない。どちらにせよ「今」をしっかりと生きよう。そうすればいつか私にふさわしい「その時」が来たら分かるような気がす

る。いつ気づくか、いつ出会えるか分からないけれど、何にせよ「意味のある人生」にしたい。その最初のステップ、今、目の前にある高専での生活からはじめようと思う。

そして最後に、去年でもなく来月でもなく、今この時に「呼人」に出会えて良かった。

鼻

2年1組 服部 隆裕

芥川龍之介。私がこれまで出会った作家の中で、何か身震いするような衝撃を与えたのは、未だに彼一人である。わずか35年という激動の人生、全て計算済みの繊細な表現、決してハッピーで終わることのない深い構成...など、彼の破天荒な小説に、私だけでなく皆も何かしら感じたはずだ。思えば私が初めて芥川と出会ったのは、小さい頃の童話『蜘蛛の糸』だったと思う。その後、羅生門と出会ったわけだが、その時に私は初めて芥川のすごさを肌で感じる事が出来たような気がする。その時の感動と衝撃は、今でも忘れることが出来ない。

ところで、今回の『鼻』だが、選んだ理由として、短編小説で読み易く、かつとても深い表現であり、羅生門のような人間の揺れる心が感じられたので、深く考え易かった、などが挙げられる。

さて、そろそろ本題に移りたい。鼻は、一人の僧を主人公とする小説で、題通りキーポイントとなる鼻をめぐる僧の心境や周囲の対応を描いた作品だ。私はこの話を読んで、非常に短編な割にとっても内容が難しく感じた。とはいえ、何度も読み返すうちに芥川独特の表現や彼自身の人間観が描かれている場面をいくつも発見でき、羅生門のような奥深さを感じた。

もう少し僧について付け加えるとこの僧は、とても大きな自分の鼻を心の中で気にしていたのだが、実はそれ以上に周囲の視線というのが気になっていた。どうにかして鼻を小さくしたい、その一心で毎日を送っていた僧に、突如事件が起こる。鼻が小さくなったのだ。しかし小さくなった原因

は不明である。突然にである。とはいえ僧は喜んだ。僧は、文中で言うなら晴れ晴れした気分、となったのだ。だが再び事件が起こる。周囲のエゴイズムがこれまで以上に僧へ向かってくるようになったのである。やたらとじろじろ見たり、集団で笑い馬鹿にしたり...と、周囲のエゴはどんどんエスカレートしていくのだ。これに対し、僧はただぼんやりと周囲のエゴに悩まされ続けるしかなかった。なぜなら、小さくなった鼻が大きくなる方法などどこにもないのだから...。周囲に悩まされ続け、僧は小さくなって良かったはずの鼻を、ついに大きい方が良いと思うようになる。全ては周囲のせいで...。この後矛盾しながらも再び僧の鼻は元に戻る。原因はやはり不明だが僧は鼻が小さかった頃と同じように、晴れ晴れした気持ちとなるのだ。しかし、その後僧のもらした一言に、私は身震いを覚えた。—これでもう誰も笑う者はいないに違いない...。結局の所、僧は鼻が大きい小さいなどが本題でなく、人にさえ笑われなければ全ては良かったわけだ。思えばこの話の僧は終始人の目を気にして生きていた。その姿は何か寂しく、悲しく感じられて私はならなかった。もしかすると芥川は、この僧の姿を用いて、私達に自分を持たない、人に左右され易い人間を示してくれていたのかもしれない。読み終えて、私はそう感じている。

思えば、今の自分は僧と変わらない気がする。昔、次のようなことがあった。中学校から短髪だった私は、やや伸びた自分の髪をやたら気にしていた。このままでは笑われる、もちろんその髪型を見慣れていないのもあったと思うが、僧のように悩みをスッキリさせた。しかしどうだろう。お分かりの通り、笑われると思って切った髪型を大勢の友達に馬鹿にされてしまったのである。正直ショックだった。それ以来やたらと周囲が気になり、自分の髪まで否定しだし、髪を切った自分に寂しささえ感じるようになってきた。以来今の髪型なのだが、よく考えてみれば、自分の意志で髪は切ったはずなのに、周囲の言動で自分の心まで、しかも自分の手で揺らしていたように思う。それこそ、あの僧のように、笑われなければ、そういう他人の目しか見ていない、自分をはっきりと持てていない人間に自分はなっていたのだ。

ただ精読するだけでなく、自分の経験も交えて考えてみると、私は芥川龍之介という偉大な作家から、人間として大切なことを学んだような気がする。自分、というものをしっかりと持つ大切さ。芥川はあえて人間の弱い所、即ち、僧のように他人に揺れ動く自分を見失った姿を表現することで、逆に私達に、自分を持つ人間の強さ、すばらしさを伝えたかったのかもしれない。私はそう信じた。

いよいよ2年生が始まる。新たな始まりとなるこの大切な時期に、自分自身を、しかも小説を通じて学ぶことが出来たのは、私にとってきっと有意義だったに違いない。また、これらを機に自分自身にもっと自信を持って生活できるよう心がけたいと思っている。これらが自分にとっていい刺激となるかは私にも分からないが、いずれにせよ自分に弾みをつけて良いスタートをきれるよう頑張っていきたい。

人生の目的とは

2年2組 西 洋平

死ぬ時に一言「人生に愧はなし」なんて言葉を言ってテレビなどでは死んでいく人がいる。この言葉が心から言える人がいるのなら本当に尊敬する。こういう人達は、本当に人生に満足できた人達なのであろう。今の私にはとうてい言えない言葉だ。なぜなら、まだ人生を楽しんではいないからだ。まだ満足といえるような事はしていない自分になぜ言えるのだろうか。一生一品という言葉がおかしの世界ではあるようだが、私の一品はまだ絵画さえも描けていない。これが私の人生の目的である。

私は今まで生きていることに意味など感じたことがあるかと思った時、すぐにはないと返事してしまうだろう。それは自分の本当にやりたいことを未だに見つけられずにいるからだ。いま、という時を真剣に見つめ、何の為にあるのか、そんなことを考えたこともない。本当に無駄遣いしていたと思う。この人生の目的という本を読んでそう思えた。

では、人生の目的とは何なのだろう。私が思うに、生きることと直接の関係を持つものだと思う。それこそ経済的豊かさよりも強く、必要なものだ。自殺者数について次のように書いてある。「ここ最近では3万人を超えた。けれど不景気が原因ではない。その理由はバブルに向けて活気づいていた89年にも2万6,000人と前年より増加していたからだ」私はこれを見たとき、今まで思い込んでいたことがくつがえされた。いつの世にも落ち込みが激しくなりすぎて自殺しているのだと思う。もしこんな人々に人生の目的があったらどうなるだろう。まだやりたいことがあったなら本当に自殺などしたのだろうか。私はこう思うようになった。人生の目的があることは生きることには欲張りになることだ。生きることによって人生の目的を発見して、それを達成できると。

人とは死ぬのは本当に簡単である。私は死んだことがないけど、ある程度の勇気があればできることだ。それに比べて生きるとは本当に大変だ。お金は必要だからいつも働かなくてははいけない。人ともつながっていたいと思うし、自由にやればできるものじゃない。事故や病気で亡くなる人も少なくない。生きるとは本当に大変だと思う。けれど生きていなければ、いけない。私は自分の人生の目的がわからない。これを見つけなくては最期に笑ってなんてできない。いつまでもカッコよい人であるには、やっぱり生きることだと思う。

この本は、私に人生の目的を見つけろといっているのだと思う。私の人生の目的が書いてある通りだとすると、人生の目的を見つけることだ。私もそう思う。そのためには一生懸命生きていきたい。

私はどうやったら見つけれられるのか考えてみた。ただ生きるだけでは見つからない気がする。

方法としては共感できる人の作った人生の物語りを信じることがあげられる。分かりやすくというと、あくまで一つの方法だが、宗教を信じる。どんな宗教でも信じるのが一番の早道だと思う。信じることで、その物のがこうなると思い、思うことが目的となる。これは人のうけうりだが、それはいい方法だと思う。そのためにはその人、又はそれを作った人を信じなくてははいけないそうだ。私には難しい。私は心から信用できるのは友人と肉親だけだからだ。

では私でもできることは、自分で物語をつくることだ。人のものではなく自分自身でイメージすることを実現していくことだ。これは誰にでもできることだ。けれどこれはこれで難しいことだ。努力をしないと実現できない。私はいまこの物語、私の伝記を作れるように努力したい。

この他にもいくつも目的をつくる手段はある。そのいろいろな方法で実現して、人生の目的をクリアしていくのが、これからやっていかなくてはいけないことだ。人生とは、一人ではつぐれない。けれど一人で作っていかなくてはならない。方法を見つけるそれも一つの人生の目的ではないのだろうか。

私の思い描く人生とは、挫折や苦労は山ほどあると思う。けれどその挫折や苦労に負けず、疲れたらそこで休みをとってまた進めばいい。けれど進むことをやめてしまったら、それは道ではない。一生懸命進んで、夢が叶えられるようにがんばって、途中で、夢が叶う前に終りを迎えても、最期は笑って「この人生くいはなし」と言えるような、私の思うカッコイイ最期を迎えてほしいと思う。

ヴェロニカ

2年3組 田代 高浩

この本を読んで、「ヴェロニカ」と呼ばれた女性はとても勇敢だと感じた。キリストが二人の囚人とともにゴルゴタの丘にさしかかり、再度ひざを折り、もう立ち上がる力のないように見えたとき、ヴェロニカと呼ばれた女性は通路を遮ろうとする兵士にはとんじゃくせず、キリストに近づいて、変わり果てたその姿をしばらく眺めていたが、泥とつばと血のしたたる彼の顔を、自分の額を覆っていた布でぬぐってやった。一見ごく普通の優しい行為のように見えるが、大衆は原始的な残酷な本能に駆られ、その倒れたキリストに向かって罵声を浴びせかけていたということを考えると、その行為はとても勇気のいることだったに違いない。僕だったら、大衆といっしょになって罵声を浴びせかけていただろう。僕はこの大衆のどうにもならぬ凶暴な気持ちや弱さによる恐ろしい雰囲気の中

中で一人だけでも、人間をかばおうとした女性がいたことに、ほっとさせられ、救われたような気がした。大衆がどんなに墮落しても、人間の中には信頼できる優しい人がいるということ、このヴェロニカという女性は僕に教えてくれた。

このような場面は、ほかにもいろいろある。作者が5年前、フランスに留学しているとき、アルデッシュという南仏に近い山国の中で聞いた話には、ある日、フランス人の抗独運動者たちと戦って傷ついた一人のドイツ兵が逃げ場を失って、フランスの百姓家の納屋に隠れた。彼を見つけたその百姓の内儀さんは、この敵兵を味方に渡すべきか、それとも傷が治るまでかくまってやるべきかに苦しみ、村の人や自分の同胞を裏切るのを承知で、敵のドイツ兵を一週間の間かくまい続けた。だが、ある日、この秘密はついに村の青年たちに発見された。青年たちは、捕虜を死刑にしたいだけではなく、この内儀さんをも「フランスを裏切った女」とのしりながら殺してしまった、という話だ。僕は、ヴェロニカはここにもいる、と感じた。この内儀さんは、敵のドイツ兵をかくまった時点で、自分の死を覚悟していたのだ。それでも、なおドイツ兵をかくまい続けたこの女性は、ほんとうの「人間」だったのだ。それと同時に、こんな女性が死なないといけなかった、ということは、とても悲しく、残念なことだ。

この内儀さんの悲しみに満ちた像は今日、その村の入り口に飾られているそうだ。そして、その像の下には「あなたはわれわれよりほんとうのフランス人だった。人間だった...」というような文字が彫り込んであるそうだ。ほんとうにその通りだ。この女性こそが僕たちよりほんとうの「人間」だったのだ。

女性の心が、男性のつくった社会や政治を超えて、美しく輝いたのは、こういう場合である。

僕はこの二人の女性に、「人間」というものを考えさせられた。もちろん、キリストに罵声を浴びせかけた大衆や内儀さんを殺してしまった青年たちが持っている凶暴な気持ちや弱さも「人間」である。だから、僕たちはヴェロニカや内儀さんのような「人間」にはなれなくても、彼女たちに少しでも近づくように努力していかなければならない。

にんじん

2年4組 假屋 親尊

特徴的なタイトルである「にんじん」という物語を読んでいくと、物語全体を通して気になることは、物語の主人公である、にんじんと呼ばれる少年と、その母親との関係です。物語を読み進めていくと、にんじんと母親との関係のひどさに驚かされます。事あるごとに、にんじんに対して冷たい仕打ちを母親は行います。「きたない話で恐縮ですが」の中にあるように、にんじんがそそうをしたものを、スープに溶かして、にんじんに飲ませるように、仕打ちというより虐待のような信じられないこともします。

しかし、このようなひどいことばかりではなく、愛情を感じさせるような行為が所々に見られるため、初めは単ににんじんを嫌っているのだろうと思っていましたが、どうもそれだけではないのではないかと思います。

もしかしたら、この異常とも思えるにんじんに対する行いは、「かわいさ余って、憎さ百倍」とも言われるように、にんじんに対する深い愛情の裏返しではないかと思いました。

にんじんと言う少年は決して、天使のようにかわいい子どもではなく、子どもが持つ特有の暗い部分を強く表したような子どもで、うそもつけば、いかにして自分が不利にならないようにするかなど、ずる賢い考えを持っています。そのような子どもを、どうにかして立派な一人前の者にするという母親のあせりにも似た感情が、この異常な行為の理由ではないかと思います。

しかし、にんじんにはそのようなことが分からず、冷たい母親という風に、にんじんの目には映ったのではないのでしょうか。

この二つのことが複雑に絡み合って、にんじんが愛情を求めるのに母は冷たくあしらう。また母が愛を与えようとする、にんじんは深く心を閉ざすといった、お互いに求め合っている愛情が接点を見つけれないといった状態を生み出しているのだろうと思い、悲しく感じました。

この「にんじん」を読んでいるうちに、今まで読んできた本とは全く違う不思議な感じを受けました。それは、文章が、とても簡素な一文、一文で構成されているためです。しかも現在形だけで書かれています。

しかし、文章が単純で面白味の無いものだということではなく、簡単であると同時に明晰な文体で表現されることにより、物語を読んでいるというより、実際にその場面を自分の目で見て、耳で聞いているように頭の中に鮮明に映像が浮かんできます。「葉っぱの嵐」は、嵐がやって来ることによって、空は厚い雲におおわれ、闇夜のようになり、強く吹く風に木々は大きくしなり、葉が揺れざわめく様子を見ているにんじんの嵐に恐怖している心の様子を、「うまごやし」では、にんじんが固いパンを苦戦しながらほうばる様子と、緑の青々としたうまごやしの葉の海の中で、遊ぶ、にんじんとその兄フェリックスの様子がとてもはっきりと想像できます。

このにんじんという作品で印象に残ったのは、簡素でいて明晰な文で表わされた、にんじんと母親との関係です。母に求める愛情の深さと大切さ、母が与える愛情の大きさを表わしているのではないかと思います、愛情の大切さをとてもよく感じました。



● 図書館からのお知らせ ●



新着図書・A Vソフト案内



(専門図書のみ)

これは受入れた図書の一部です。データ移行のため、入力されていない図書が多数あります。

■ 図 書

書 名	出 版 社	書 名	出 版 社
ゴールド・ラッシュ	新潮社	Perl で作る C G I 入門	ソフトバンク
バースディ	角川書店	よくわかるXMLの基礎	日経BP社
橋をかける	すえもりブックス	ファインマン物理学 . .	岩波書店
クロスファイア 上・下	光文社	解析力学	朝倉書店
本当は恐ろしいグリム童話 .	K.K.ベストセラーズ	素粒子物理学の基礎	朝倉書店
ぼくはこんな本を読んできた	文芸春秋	ベクトル解析演習	岩波書店
チグリスとユーフラテス	集英社	センサ工学の基礎	昭晃堂
幕末維新のしくみ	日本実業出版社	ニューラルネットワーク情報処理	産業図書
日本史研究	山川出版社	マイコン制御	廣済堂出版
日本の近代	中央公論出版社	リレーシーケンス制御	廣済堂出版
Linux プログラミング	ソフトバンク	アルコリムの基礎	共立出版
C++ Builder 入門	ソフトバンク	画像処理工学	共立出版
はじめて読むMASM	アスキー出版	光センシング工学	日本理工出版会
オブジェクト指向プログラミング入門	培風館	シーケンサ活用テクニック	電気書院
TCP / エア バイブル	アスキー出版	よくわかるシーケンス制御入門	日本理工出版会
光エレクトロニクス入門	昭晃堂	ソフトウェア工学の基礎知識	昭晃堂
アナログ電子回路	昭晃堂	科学技術略語小辞典	アルファベータ
ディジタル制御理論	昭晃堂	読めそうで読めない漢字2000	講談社
計測センサにおけるディジタル信号処理	昭晃堂	美しい声、美しい歌声	裳華房
半導体デバイス	コロナ社	エコロジー小事典	講談社
無線工学 A , B	電機大出版局	英語リスニング科学的上達法	講談社
はじめての材料力学	森北出版	監督の条件	読売新聞社
電気機気学の講義と演習	森北出版		

■ D V D

タ イ ト ル	発 行 所	タ イ ト ル	発 行 所
ブレア・ウィッチ・プロジェクト	クロックワークス	ラブ・オブ・ザ・ゲーム	ソニー
マトリックス	ワーナー	ナインハーフ	日本ヘラルド
無問題（モウマンタイ）	バンダイ	ノッティングヒルの恋人	ポニーキャニオン
親指タイタニック	エスピーオー	オースティン・パワーズ デラックス	日本ヘラルド
プリティ・ブライド	ブエナビスタ	ロック、ストック&トゥー・ スモーキング・バレルズ	ソニー
サウスパーク 1	ワーナー	ロザンナのために	ソニー
スプリガン	バンダイ	シックス・センス	ポニーキャニオン
ワールド・イズ・ノット・イナフ	20世紀フォックス	トゥルー・ロマンス	アミューズ
WHO AM I ?	パイオニア	海の上のピアニスト	日本ビクター
ボクらはいつも恋してる！	日本コロムビア	ブギーポップは笑わない	ビーム
ブギーポップは笑わない 1 : Boogiepop Phantom	バップ	交渉人	ワーナー
エリザベス	日本ヘラルド	トイ ストーリー 2	ブエナビスタ
秘 密	T B S	サイダーハウス・ルール	アスミック
ジャンヌ・ダルク	ソニー	アメリカン・ヒストリーX	日本ヘラルド
地雷を踏んだらサヨウナラ	アミューズ	アナザヘヴン	アナザヘヴン
ジョー・ブラックをよろしく	ソニー	グリーンマイル	ポニーキャニオン

■ V I D E O

タ イ ト ル	発 行 所	タ イ ト ル	発 行 所
スタンド・バイ・ミー	ソニー	The True Meaning of	R o o m s
メリーに首ったけ	20世紀フォックス	“ Brotherhood ”?	テレビックアート
ライフ・イズ・ビューティフル	松竹	GLAY DOME TOUR “ pure soul ”	K i / o o n
ライオン・キング	ブエナビスタ	1999	アイ・ヴィー・シー

タ イ ト ル	発 行 所	タ イ ト ル	発 行 所
長嶋茂雄 第一巻	メディアファクトリー	笑う犬の生活：ミル姉の涙	ポニーキャニオン
長嶋茂雄 第二巻	メディアファクトリー	笑う犬の生活：トシとサチと空	ポニーキャニオン
長嶋茂雄 第三巻	メディアファクトリー	シークレットライブ 99 SAS in 歌舞伎町	ビクター
バグズ・ライフ	ブエナビスタ	BOHEMIAN SUMMER	東芝 E M I
弾丸ランナー	日活	2000	C I C ビクター
STAR WARS I: ファントム メナス	T H X	アメリカン・グラフィティ	C I C ビクター
笑う犬の生活：土下座の心	ポニーキャニオン	アメリカン・ビューティー	ソニー

■ C D

タ イ ト ル	発 行 所	タ イ ト ル	発 行 所
NOW & THEN	SENHA & Co	あすなろ	FOR LIFE
ザ・ベリー・ベスト	ポニーキャニオン	delicious way	K i / o o n
BEST OF	BMGファンハウス	EMI	z e t i m a
RAINBOW	avex trax	REAL	z e t i m a
HEAVY GAUGE	E p i c	3rd - LOVEパラダイス	トイズファクトリー
CRUISE RECORD 1995—	ビクター	プッチベスト	東芝 E M I
2000	G I Z A	Q	ポリドール
LOVEppears	東芝 E M I	勝訴ストリップ	ポニーキャニオン
GOLDEN BEST	ポリドール	RECYCLE	東芝 E M I
THE BEST PENNY LANE	E p i c	Memories	BMGファンハウス
ゆずえん	ワーナー	Wait & See	UNLIMITED
桜の木の下	S M E	8	ワーナー
Dear	UNLIMITED	DRIVE : GLAY complete	ビクター
Duty	avex globe	BEST	東芝 E M I
Fresh	avex trax	RH singles & ...	

●平成12年度 図書館委員・学生図書委員紹介●

平成12年度図書館委員

図 書 館 長	田 辺 正 実	「図書館だより」編集
一 般 科 目	堤 奎 一	「AVソフト」選定
情報通信工学科	川 野 光 則	「図書」選定
電 子 工 学 科	中 岡 敏 文	「図書館だより」編集
情 報 工 学 科	嶋 田 泰 幸	「AVソフト」選定
	村 上 純	「図書」選定
庶 務 課 長	矢 野 達 郎	

平成12年度学生図書委員一覧

1 学年 責任者 小川 徹

学級	1 組	2 組	3 組	4 組
氏名	小 川 徹	扇 崎 信 也	山 下 龍 彦 坂 本 壽 弘	前 田 弘 史

2 学年 責任者 小澄 祐介

学級	1 組	2 組	3 組	4 組
氏名	小 澄 祐 介	中 原 辰 徳	上 田 豊	齋 藤 景 子

3 学年 責任者 船津 貴央

学級	1 組	2 組	3 組	4 組
氏名	船 津 貴 央	木 村 優 祐	松 尾 和 美	守 田 幸 司

4 学年 責任者 村上 匡

学級	1 組	2 組	3 組	4 組
氏名	村 上 匡	田 上 貴 士	新 山 龍 馬	鷹 羽 純

5 学年 責任者 中村 嘉彦

学級	1 組	2 組	3 組	4 組
氏名	中 村 嘉 彦	田 中 麻 子	右ノ子 賢 吾	長 野 宏 輔

- ・ 学生図書委員会委員長 田中 麻子
- ・ 学生図書委員会副委員長 村上 匡

● 図書館利用状況報告 ●

1. 入館者数 (平成12年1月～12月)

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
入館者数	5,927	7,929	4,491	5,464	7,163	9,853	9,595	4,591	10,504	10,524	8,254	6,839	91,134

開館日 203日 1日当たり平均入館者数 約450人

2. 各クラス別貸出冊数 (平成12年4月～12月)

クラス	1年1組	1年2組	1年3組	1年4組	2年1組	2年2組	2年3組	2年4組	通信3年	電子3年	制御3年	情報3年	通信4年	電子4年	制御4年	情報4年	通信5年	電子5年	制御5年	情報5年
貸出冊数	152	262	91	204	60	152	87	59	86	136	63	151	183	148	141	140	380	207	304	192

3. 蔵書数

(平成12年12月1日)(単位:冊)

区 分		総 記	哲 学	歴 史	社会科学	自然科学	工 学	産 業	芸 術	語 学	文 学	計
図書 の冊数	和 書	4,993	2,513	4,771	4,958	9,053	16,790	901	2,356	2,444	10,296	59,075
	洋 書	489	14	48	24	653	1,515	5	20	339	856	3,956
	計	5,475	2,527	4,819	4,982	9,706	18,305	906	2,376	2,783	11,152	63,031
雑誌 の種類数	和雑誌	20	2	5	29	24	85	22	21	8	3	219
	洋雑誌	5			1	8	16			3	2	35
	計	25	2	5	30	32	101	22	21	11	5	254

4. 視聴覚資料

種別	LD (レーザーディスク)	CD (コンパクトディスク)	ビデオテープ (内DVD)
数量	190 枚	520 本	726 (32) 巻

マナーを守ろう!!

図書館では次の点に気をつけて下さい。

飲食物を持ち込まないこと。

静かに振るまうこと。

検索用パソコンの本来の役目を忘れないで。

読んだ本は元に戻して。

表紙は図書館入口からカウンター方向を見たものです。

「図書館だより」担当編集委員

図書館長 田辺正実

電子工学科 中岡敏文